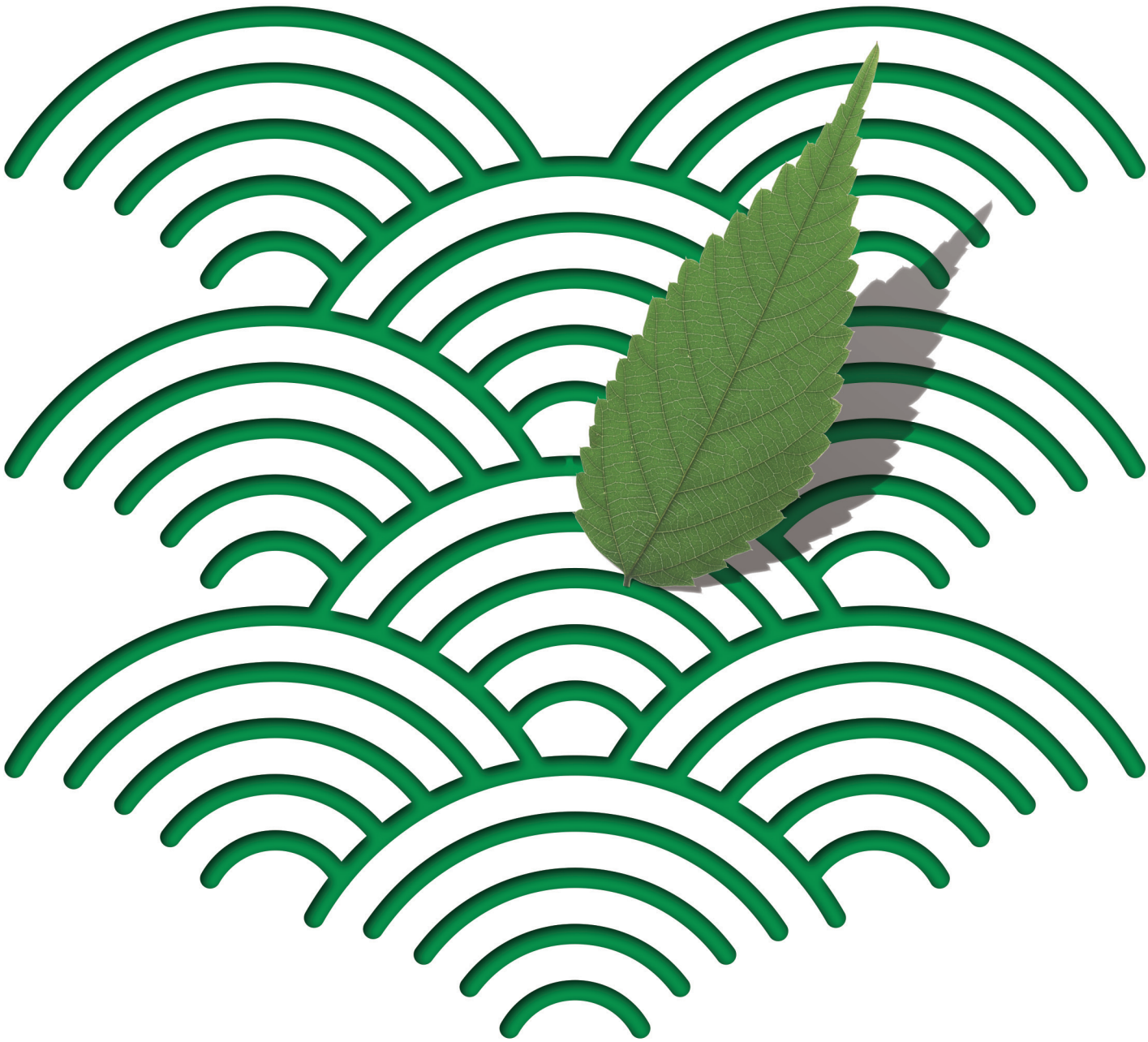
生涯学習情報誌
Life Learning

7
2017
July
NO.323



生涯学習開発財団

ワークを通して一番楽しんでいるのは自分だと感じる

■楽しみながら自分と向き合えるアートワーク

アートワークセラピーとは〝アートの力と心理学を用いた非言語のセラピー〟ということだが、具体的にどんなワークなのかを体験したく、クエスト総合研究所の目黒スタジオで公開されている〝アートワークカフェ〟を訪ねた。導いてくれるのは、マスターアートワークセラピストの村松美紗さん。

最初に16種類のテーマ、たとえば「ミッションアート…自分の好き！を見つけたい人に」「リラクゼーションアート…ちょっとお疲れ気味の時に」「ジョイフルアート…楽しんで元気がほしい人に」「決断力アップアート…迷っていることがある人に」などから、自分がやりたいワークを選ぶ。設問に沿って紙に絵を描き進め、迷走しながら1枚の絵ができ上がった。と思いきや、それは前段で、その絵を見ながらセラピストの問いかけに内面を振り返り、頭の中がスッキリとしたところで、10㎝四方の紙片にアートを表現していく。色鉛筆、クレヨンなどの画材のほかに、スタジオに用意された色とりどりの石やビーズ、布、木の枝、葉っぱなども使って立体的に。愛おしいアートのできあがりだ。

■数字の達成ではない人と関わる仕事

村松さんは6年前まで販売の仕事をしていたが、数字の達成にしか充実感を得られないことに違和感を感じていた。転職を模索する中で、この資格を知り、すぐにアートワークカフェに参加した。

「自分の進む道を見つけたくてミッションアートを選んだのを覚えています。心地よくて、アートを用いるので理解しやすく、自分はもちろん、周りの人を笑顔にしたいと思い、学び始めました」

マスターアートワークセラピスト
村松美紗さん

悩みを持ってカフェを訪れた人が、ワークを続ける中で心を開ける仲間ができたり、友人を誘って参加してくれたりと、その人の世界が広がっていくのが嬉しい。高齢者がコラージュをしながら「昔はなあ……」という話を聞くのも楽しいそうだ。

マスターアートワークセラピストは、アートワークを6か月、自己分析を6か月、さらにファシリテーターコースを10か月、最後に試験に合格してやっとなれる。長丁場だったが、仲間に会う楽しみやチームシップの大切さを学び充実していた。

■障がい者、高齢者、子どもたちとのふれあい

アートワークセラピストの活躍シーンはさまざまだ。アートワークカフェを各地で開催するほか、年3回、原宿のカフェでイベントカフェを共同で開催する。クエスト総合研究所と姉妹組織のNPO法人子ども未来研究所では、野外体験学習を通しての子どもの心のケアや心の予防教育をしており、その中でもアートワークが大きな役割を果たしている。また高齢者施設で、リハビリ的な意味も含めたアートワークをすることもある。

村松さんはふだん、精神障がい者支援の仕事をしており、障がい者が社会の中で生きやすくなるための手助けとしてアートワークを採り入れている。それぞれの心の中にいっしょに向き合い、心の傷の原因を見つめたり、納得や発見をしたりするのにアートワークは最適で、力になっている。

■自分が好きなことをして時間を満たす

「アートセラピーの仕事を始めてから『すごくイキイキしてるね』と両親から言われるようになりました。甥や姪といっしょにワークをして楽しむことも多いのですが、いいねと羨ましがられます。職場の上司からは、聞き上手になったと評価され、自分でも自覚があります。上手というよりも、人の話を聞くのが楽しいという感覚です。

ワークを通して自分自身が一番楽しんでいる気がします。自分を知っていくにつれ、自分を大切にしようという気持ちが強くなりました。たとえば、私はいまテレビを視ません。不要な情報がどんどん入ってきて、疲れるなあと思っていたのですが、3年前に故障したのをきっかけにやめました。代わりに、保存食を手作りしたり、裁縫をしたり、本を読んだりと、好きなことをして時間を満たすことができるようになりました」

●資格の認定元
株式会社クエスト総合研究所　〒141-0021 東京都品川区上大崎4-5-37-5F　TEL 03-3779-1844　http://questnet.co.jp/

「文化を日本外交の中心に置くべき」言い続け継続中

元文化庁長官
近藤文化・外交研究所代表

近藤誠一
Kondo Seiichi

1971年　東京大学教養学部教養学科イギリス科卒業
1972年　外務省入省
1973年　英国オックスフォード大学留学
2003年　外務省文化交流部長
2006年　ユネスコ日本政府代表部特命全権大使
2008年　駐デンマーク特命全権大使
2010年　文化庁長官（～2013年）
2013年　近藤文化・外交研究所設立
2016年　瑞宝重光章受章

ALSACE-JAPON Un projet de centre artistique pour l'ancien lycée Seijo

Au milieu des vignes, tout l'art du Japon

Vides depuis 2005, les locaux de l'ancien lycée japonais Seijo, au milieu du vignoble de Kientzheim, font l'objet d'un projet d'envergure : la création d'un centre de restauration d'objets d'art japonais possédés par les musées européens. L'idée est de rénover les lieux et d'y accueillir des artisans d'exception et des manifestations culturelles. Reste à trouver 42 millions d'euros...

Manche d'un katana (sabre japonais) de collection. PHOTO DNA - ACB

« Un lieu d'inspiration au cœur de l'Europe »

Propriété du conseil départemental du Haut-Rhin, les locaux de l'ancien lycée Seijo, à Kientzheim, pourraient être cédés pour l'euro symbolique au projet de centre culturel japonais. PHOTO ARCHIVES DNA

Seiichi Kondo. PHOTO DNA - ACB

LE LYCÉE SEIJO, FERMÉ À L'AUBE DE SES 20 ANS

En 2005, le lycée Seijo fermait. PHOTO ARCHIVES DNA

Depuis 2005, nombre de projets sans suite

Perpétuer le lien particulier entre le Japon et l'Alsace

À Tokyo, le taikomi polisseur du katanas Yoshihiko Usuki travaille sous l'œil de son apprentie Rumi Hemmi. La jeune femme a grandi en Alsace et rêve déjà d'y revenir... PHOTO DNA - ACB

MICHELLE FREUDENREICH

フランスのデュエール・ヌヴェル・ダルザス紙に紹介された、ぶどう畑の中に日本文化の拠点ができるという記事
上・2017.3.26
右・2016.9.7

DNA COLMAR ET SA RÉGION

KIENTZHEIM Une nouvelle piste pour l'ancien lycée Seijo

Vers un centre culturel japonais ?

L'ancien lycée Seijo de Kientzheim accueillera-t-il un centre culturel japonais ? Un projet est à la réflexion en ce moment. Il n'est pas le premier. Depuis la fermeture des portes de l'établissement au printemps 2005, plusieurs propositions ont déjà été avancées. Sans succès.

Élaborer un projet détaillé, puis trouver des mécènes

Depuis la fermeture en 2005, l'ancien lycée Seijo a, à plusieurs reprises, suscité l'intérêt de responsables. Cette fois-ci sera-t-elle la bonne ? PHOTO DNA ARCHIVES

MICHELLE FREUDENREICH

聞き手：上野由美子（右）

古代オリエントガラス研究家。UCL（ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン）考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加1999年～2002年）。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

外務省時代から一貫して「文化を日本外交の中心に置くべき」と言い続け、「世界文明フォーラム」の開催など、文化外交を推進してきた近藤誠一氏。２０１０年～２０１３年は、初の外交官出身の文化庁長官を務めた。退官後、近藤文化・外交研究所を設立。海外での幅広い人脈を活かして、文化交流活動や、日本の伝統的工芸の発信、認知度向上のために尽力している。

――日本の伝統工芸品は、伝承の危機にある分野もあります。海外で評価された作家が逆輸入的に日本でも人気が出る現象もあり、作家さんたちがその目を海外へ向けてはいますが、なかなか機会がないと聞きます。

そうですね。安価な工業製品に押されて工芸品が売れない。後継者がいない。師匠だって将来に不安がある。道具や材料が手に入らなくなってきた。ずっと叫ばれている危機です。それならば海外へと考えるのは当然で、成功している人も少なくありません。ヨーロッパでも、パリのギメ博物館、英国のセインズベリー日本芸術研究所、その所長で大英博物館のキュレーターでもあるニコル・クーリッジ・ルマニエール教授などは、日本の工芸を芸術として高く評価してくれています。

しかし、厳しい話もあります。以前オランダのユトレヒトの美術展で、伝統工芸の出展を断られたことがあります。作家は人間国宝で、現地の日本大使館から外交ルートでの後押しもしましたが、それでも実現しませんでした。北斎などのアートは歓迎だがクラフトは要らないというのです。日本の工芸に対する評価はこの程度かと、危機感を持ちました。日本人には、器や道具にも用の美

を感じる感性があります。独特の自然観や繊細な美意識、目に見えないスピリッツを味わう素晴らしいものです。でもその価値観をそのまま向こうに持っていっても通用しないと考えた方がよいと思います。

――どういったアプローチをしたら良いですか。

タペストリーや磁器など、伝統工芸はヨーロッパにもあり、それらはアートの一つと認識されています。そして、絵画、彫刻、演劇、音楽など他のアートとの競争は激しく常に切磋琢磨し合っているのです。日本の工芸も現地のトレンドを見ているプロデューサーやデザイナーなどの視点を取り入れ、伝統工芸の高い技術や精神とコラボした、KŌGEIとしての魅力をアピールした方が受け入れられやすいと感じます。

そうしたきっかけにもなるよう、ギメ博物館、ルーブル美術館、ニコル教授らとも手を組みながら、日本文化の理解浸透とマーケットの拡大につながる、起死回生の策を練っているところです。

フランス・アルザスに日本の伝統文化の拠点を

――計画中のアルザスの話を聞かせていただけますか。

フランスのドイツ国境に近いアルザス地方のキンツハイムに、アルザス成城学園という日本人学校がありました（1986年～2005年）。その寄宿舎が使われずに残っていて、私が外務省の文化交流部長をしていた時に、隣地にある欧州日本学研究所のクライン所長が、隣同士で施設を活かして、両国のために何かしたいというお話がありました。03年の11月だったと思います。アルザスは日本びいきで、閉校したとはいえ成城学園があった場所を単なる観光地にはしたくないとも。すぐできることとして、国際交流基金に頼んで、日本の幾つかの大学が夏休みに行ってセミナーをやっています。

文化庁長官の時にクラインさんが再び日本に来てくれました。そのときは具体的じゃなかったのですが、昨年の夏に急に話が進んで、改築案を示したところ、土地は1ユーロで譲り受ける、そのかわり数年以内にしっかりしたものを作る、ということで合意したところです。

――どういう事業をやっていくのですか。

実はヨーロッパには、修復できないで眠っている日本の工芸品が大量にあるのです。それらの修復を請負い、展示したりオークションに出したりする。コレクターも喜ぶし、マーケットの拡大にもつながります。

修復にあたるのは日本から行く工芸作家です。高い技術を披露しつつ、ヨーロッパのアーチストやプロデューサー、デザイナーたちと交流できます。それと、これが肝心なのですが、修理するところを見せたり体験させたりするのです。音楽の話になりますが、フランスのナントで始まった世界最大級のクラシック音楽祭を、05年に日本に持ち込んだ「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン」が毎年5月に開催され、一番面白いのがマスタークラスという公開レッスンなんです。100人くらいが参加して一流の音楽家が学生を指導する。1時間のうちに学生が技術やスピリッツを吸収して、みるみる上達していくんですよ。指揮者の小林研一郎さんも、楽曲を作り上げていく過程を一般に見せるイベントを毎年やっています。最後に仕上がった演奏を聞くと感動的です。

――私も当連載の取材ですっかり伝統工芸の虜（とりこ）になりました。体験や見学はファン拡大には大切ですね。

私は「結果よりプロセス」とよく言うのですが、何でもネットで検索して知った気になるのと実体験は違います。日本の工芸品がどんなにすごいプロセスを経てできているのか、ヨーロッパの人にぜひ見てほしいですね。自分で焼いた器は愛着があって、ごはんがおいしいですよね。一流作家の作品はプロセスのすごさを感じられるからこそ、使うと心が豊かになるんです。

アルザスは西ヨーロッパの真ん中で、スイスのバーゼルやドイツのフランクフルトと近く、パリへも2時間程度。日本の発信拠点としてはもってこいなんです。

――日本のアニメと美術館がコラボをした「エヴァンゲリヲンと日本刀展」が世界中で人気ですが。

特にフランスでは、日本のアニメやヴォーカロイドの初音ミクなどがすごい人気ですね。日本に興味を抱く入り口としてはそれでも良いと思います。実際、新聞記事にも載っているように、いまヨーロッパで一番人気の日本の工芸は刀剣類なのです。最初はそれらの修理を中心に、持続可能な収益を確保したいと考えています。

――いつごろオープンする予定ですか。

2020年を目指しています。その過程として、来年パリで開催する「ジャポニズム展」において、職人の修復技術などを見せるなど、アルザスにつながる動きをしたいと思っています。「匠アールビバン・ドゥ・ジャポン」という一般社団法人を立ち上げ、修理の事業計画や、研修、ワークショップ、展示会、芸術家のサロンなどを盛り込んだ年間計画も作成しています。『生きた芸術』というコンセプトで、伝統文化のスピリットを感じ取り、意見を交わしながら先人からの知恵を学び、それらを現代に生かしていく契機となる場にしたいです。

芸術文化が与える〝ひらめき〟の力は、経済や政策にも革新を生み出します。大きなスポンサーを動かすために、工芸関係者、学者、職人を多く抱える自治体などからの支援を取り付けているところです。

ストラスブール大学の日本語学科の学生は200人もいるのですが、それを就職に活かせていません。うまく展開して彼らの就職にも寄与したいですし、第2段として、日本にもそういう施設を作って相互交流をしたいと考えています。

祝 2016年6月　広島大学博士号（保健学）取得

安部能成 さん（取得時59歳）

【論文テーマ】進行がん対麻痺患者に対する移乗方法の開発

人の尊厳を守る車イスへの移乗方法。普及のためにも博士号を取得

■末期がん患者でもトイレは自分でしたい

安部能成（かずなり）さんの肩書は千葉県立保健医療大学リハビリテーション学科の准教授。しかし元々は現場の人である。1984年に作業療法士の資格を取得し、25年に渡って病院のリハビリテーションの現場で、患者の身体と心の機能回復や改善のためのサポートをしてきた。そんな中、進行がん患者に対しては機能回復のためのリハビリテーションが行われないことを疑問に感じていた。

「余命何か月だから、やってもムダだから、痛みだけ緩和してそっと死を待とうというのはおかしい。余命何か月でも外に出たいし、食べたいものもあるし、何よりトイレは人の世話にならず自分で行きたいんです。おむつをされたり、管を通されて排泄をしなくてはいけないことは、その人の尊厳を傷つけます。実は車イスに乗り移れれば自分でトイレができる人は多いのです。でも介助の人手がかかるので病院は積極的じゃないし、患者も申し訳ないと我慢しちゃうんですよ。それをなんとかしたいと思ったのが研究を始めたきっかけです。

ただ私はずっと現場の人間ですので、開発した移乗方法を普及させるための発言力や説得力として、博士号まで取りたかったのです」

■1年待ちして、千葉から広島まで通学

がん患者のリハビリの分野をリードするのは広島大学の岡村仁教授だった。学びたいと希望したが狭き門で、空きがなく1年待たされた2010年、英語による試験を突破し限られた1枠を得た。

千葉から広島まで、初年度は月2回通った。ゼミのプレゼンテーションが年4回あり、そのときは前日から広島入りし図書館で準備をした。インパクトファクターのある英文誌に複数の論文が掲載されなくてはならなかったが、けっこう手間取った。メインの博士論文も審査システムが途中から変わる不運もあり、4か月の休学を挟んで結局1年がかり。6年目にして博士号にたどり着いた。

奥様とは修士課程で通った大学院で出会った仲で、高校生、中学生、小学生の3人の子育てで大変だったはずだが、理解はしてくれていた。

■あきらめてた患者の9割以上に希望が

安部さんが開発した移乗方法は、ベッドから車イスにパネルで斜面を作り体を滑らせて座る。骨に転移がある進行がんの場合は体を動かすと痛みを伴うことも多いが、この方法は患者を持ち上げないので痛みが少ないという。実際に対麻痺（両足の麻痺）患者に試してもらった結果、本人だけで移乗できた人が47%、1人が手を貸せばできた人が45%。進行がん患者でも9割以上の人が、車椅子で移動をし、トイレにいくことを可能にしたのだ。実際に余命3か月の女性入院患者が、これなら介護が苦手な夫に迷惑をかけないから家に帰れると、2か月を自宅で過ごし、安部さんも自信を深めた。

課題もまだまだある。主治医は「そんな良い方法があるなら家に帰そう」と言うが、現場は危ないことはやりたくない傾向にある。病室の狭さも問題だ。この方法で移乗するにはベッドの横に125㎝のスペースが必要だが、日本のがん拠点病院を全国調査したところ、平均は113㎝だった。

■がんサバイバーのためのカフェを月1開催

安部さんはがんサバイバーが集う「がんカフェ」を、仲間と一緒に月1回開催している。がん経験者が家にこもらず、行く場所としての役割で、ただお茶を飲んでるだけでも良いゆるい場所だが、勉強して専門家に提言する人など、けっこうアクティブだ。がん経験者ならではの貴重な情報が飛び交う。

「要介護の出発点は、一時的利用ならいいのですが、実は配食サービスなんです。買い物に出なくなる。情報に触れない。料理もしないし重いものも持たない。動きが鈍くなってケガをする。晴耕雨読のように体も頭も使い続けることが健康長寿の秘訣です。だから生涯学習が大切なんです」

2003年にオランダのホスピスを取材。「家族に排泄の世話を頼むくらいなら安楽死を選ぶ」という議論だった。